

(患者を生きる:4049)新型コロナ 在宅でのケア:2 不安な 中、もしもに備え

会員記事

2020年11月11日 5時00分



感染リスクを減らすため、金野太晴くんは外出しても店舗の中に入らないようにした＝5月、家族提供

今年2月、新型コロナウイルスの脅威は、二分脊椎(せきつい)症で、24時間人工呼吸器をつけて暮らす横浜市の金野太晴(こののたいせい)くん(11)の一家にも押し寄せてきた。国内で新型コロナウイルスの感染者が増え、スーパーやドラッグストアの店頭からマスクや消毒液が消えた。

衛生用品はたんの吸引や鼻からの食事などのケアに欠かせない。スプレーの消毒液を使えばすぐにケアが終わるが、使い切ったら補充のめどがたたない。父親

の幸雄さん(44)と母親の晴子さん(48)は、4センチ角ほどの小さなアルコール綿1枚で今までの何倍も時間をかけて丁寧に手を消毒した。

特別支援学校へ通学しても大丈夫だろうか。晴子さんは月2回の訪問診療にくる「せや在宅クリニック」の大村在幸(ありゆき)院長(49)に聞いた。「今は通常の学校生活で問題ないでしょう。太晴くんがマスクをつけても感染を直接防ぐ効果はないかもしれませんが、手をなめたりすることは防げます」

ただ、状況は数週間でさらに変わった。太晴くんが定期的に通う病院でも面会制限の紙が貼り出された。スーパーへの買い物では、狭い店内には大人だけが入るようにして、太晴くんは車いすで外を散歩した。

感染を防ぐため、できるだけ人との接触を避けたかった。東京都内の職場に通う幸雄さんがそう思っていた矢先の2月下旬、職場の全員が在宅勤務となった。「助かった」。幸雄さんは米国とオンライン会議をする機会が多い。問題となるのは時差ぐらいで、家で仕事できた。

3月に入り、横浜市内では特別支援学校も休校になった。両親の一番の気がかりは太晴くんが新型コロナウイルスに感染した場合の入院先だった。かかりつけの病院で受け入れてもらえれば安心だ。だが当

時、誰も先のことがわからず、大村さんも「太晴くんはケアの種類が多いので、何とかかかりつけの病院に入院させてあげたい」と答えるしかなかった。

訪問診療に回る大村さんにも危機感があった。もしスタッフが集団で感染すると、約300人の訪問診療が止まる。万が一のときに大村さんだけでも動けるように、他のスタッフと一切顔を合わせないようにした。
(後藤一也)

■ご意見・体験は、氏名と連絡先を明記のうえ、iryok@asahi.com へお寄せください。